ふるさと阪谷をよくする会

1　基本データ

○　地区名　　阪谷地区

○　人　口　　1,692 人

（平成 23 年 1 月 1 日現在）

○　面　積　　36.28 ㎢

○　実施主体

ふるさと阪谷をよくする会

○　地区の沿革

阪谷地区は大野市の北東部、白山山系の経ヶ岳の麓に位置し、九頭竜川を挟んで富田地区、北は勝山市、東は五箇地区に接している。集落は 18。昭和 29 年、阪谷村が大野市となる。

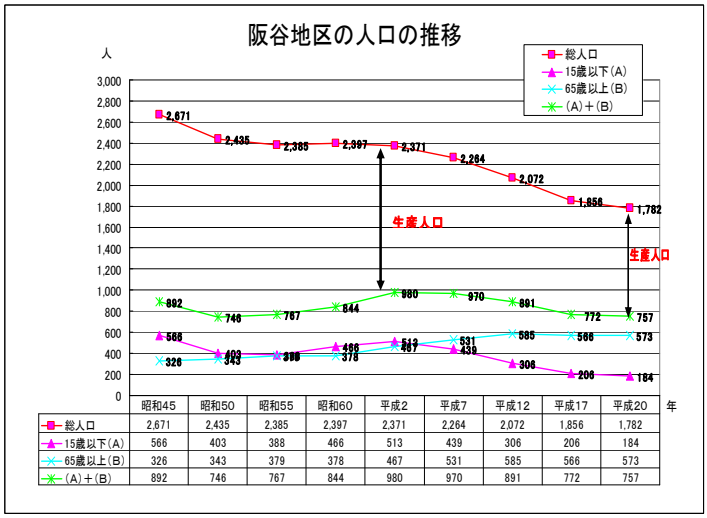
標高 250ｍ～500ｍの中山間地域で、大野市の中でも雪が多い地区である。

面積の２／３は山林。土地改良が進み、広大な棚田が広がっている。

福井県下スキー場の発祥の地、六呂師スキー場を始め、六呂師高原には、220 ヘクタールを有する奥越高原牧場、自然保護センター、青少年自然の家等の県の施設や、トロン温浴施設うららら館、ミルク工房奥越前等の市の施設を有する。

温暖化やスキー人口の減少等により六呂師エリアの観光客は減少傾向にあるが、大野市の観光の一翼を担ってきた。

2　現状と課題

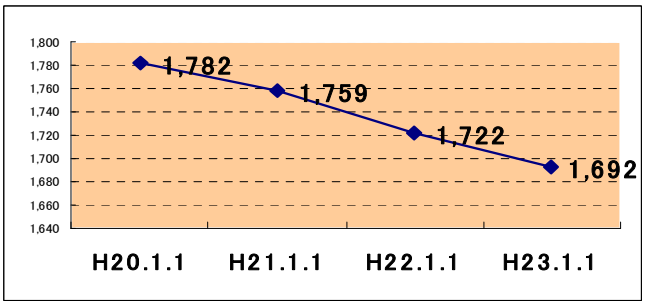


	昭和45	昭和50	昭和55	昭和60	平成2	平成7	平成12	平成17	平成20
総人口	2,671	2,435	2,385	2,397	2,371	2,264	2,072	1,856	1,782
15歳以下(A)	566	403	388	466	513	439	306	206	184
65歳以上(B)	326	343	379	378	467	531	585	566	573
(A)＋(B)	892	746	767	844	980	970	891	772	757

阪谷地区は、少子高齢化の進行により生産人口が著しく減少している。高齢化率は、平成 22 年４月１日現在で、平均 32.8%。（参考：全国平均 22.8%、福井県平均 23.4%、大野市平均が 29.00%）

このグラフが示す通り、昭和 45 年（1970 年）に、2,671 人だった人口が、平成 20 年（2008 年）には、1,782 人と、約 40 年間に 1,000 人減。比率で言うと、67%、１年平均 25 人減少している。246 人だった児童数は、62 人と約 180 人減少。比率で言うと、25%、１年平均 4.5 人減少している。

さらに下記のグラフが示す通り、平成 21 年～23 年の３年間の平均は 30 人減と、近年減少化が加速している。



特に上阪谷（落合・堂嶋・金山・小黒見）で減少が顕著で、限界集落化している。

	転入	出生	転出	死亡	転居	計
過去3年	98	25	△123	△74	△16	△90
平均	33	8	△41	△25	△5	△30

１０年後に限界集落になる可能性がある「準限界集落」も５集落あり、このような生産人口の減少が、集落の活力、しいては地域の活力の低下を招いている。

いかに他地区に誇れる産業、イベント、文化を創造し、活性化させて、生産人口の流出を食い止めるかが課題である。

また近年有機の里づくりの気運が醸成されつつある。平地より気温が１度から２度低く、経ヶ岳（１，６２５ｍ）から吹き下ろす冷たく強い山風は、虫を追い払うのに効果があり、昔から有機栽培の土壌が培われてきた。そんな土地柄もあり、「スターランドさかだに」の建設を機に、「有機自然農法研究会」や「家庭菜園の味グループ」等、有機農業グループが活動を開始。更に平成２０年度には、国の「地域有機農業推進補助事業」の認定も受け、本格的に有機の里づくりが始動した。

しかし、「有機の里」の気運の盛り上がりは、まだまだ一部に留まっており、今後この気運をいかに地域全体に広め、継続発展させ地域の顔としてブランド化させていくかが課題である。

３　事業の内容

これらの現状と課題を踏まえつつ、半年間で何ができるかを検討した結果、まず、既存のイベント「こだわり野菜を食するつどい」を充実させること、「限界集落化が進んでいる上阪谷の活性化」を検討することの２本を事業の柱とした。

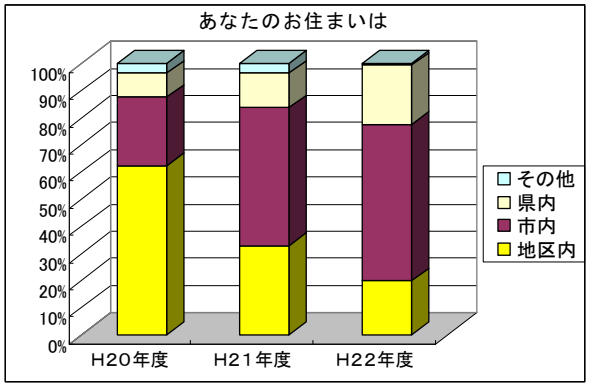
①　こだわり野菜を食するつどいの充実

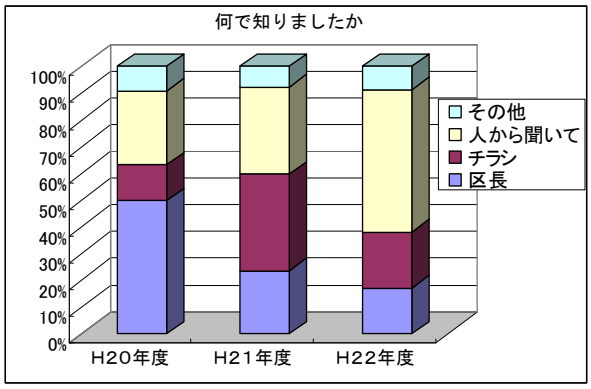
このイベントは、平成20年度、有機の里をアピールする一つの方法としてスタートした。

野菜作りから、調理まで全てを地区住民の手で成し遂げるこのイベントは、来場者の高い評価を得て、住民のやる気と元気、誇りを引き出した。

初年度は200枚の前売り券の販売だったが、３回目の今年度は400枚を販売。当日券を含めると約500人が来場。

地域住民に有機の味を知ってもらうことからスタートしたイベントが、わずか３年の間に半数以上が地区外から、それも口コミによって来場するイベントになっている。有機の里をアピールする絶好の機会ととらえ、このイベントをさらに磨きをかけ、広く地区内外に有機の里としての阪谷の魅力を発信することとした。





まず、毎回実施したアンケートの分析をおこなった。アンケートの回答率は約75%あり、

信憑性があった。
その結果、
① 「スターランドさかだにへの道が分かりにくい」
② 「待ち時間が長い」
③ 「地区内の観光施設に立ち寄らずそのまま帰ってしまう」
とういことが浮かび上がってきた。
次にこれらのことについて、どのように具体的に進めるかを話し合った。
① 「スターランドさかだにへの道が分かりにくい」については、市外からの来場者も増えてきており（21.7%）、今後さらに増えることが予想されることから、福井、勝山方面へのアプローチとして看板を設置することとした。

看板の設置場所を下見

② 「待ち時間が長い」については、ピーク時には最大50分の待ち時間となり、その不満は頷けた。そこで、待ち時間の緩和策として、会場であるスターランドの大野盆地が一望できる芝生広場で活用できるようにオープンテーブルセットを7セット購入し約30客席増やした。
③ 「地区内の観光施設に立ち寄らずそのまま帰ってしまう」については、折角阪谷に足を運んでくれたにも関わらず、車で3分、10分の距離にある「白山やまぶどうワイナリー」にも、「六呂師高原」にも寄らず帰られる方が多く見受けられた。それらの方々は、時間がないというよりも、周辺の観光地に気付いていないように感じられた。そこで、地区内の観光施設（観光資源）をＰＲすべく、阪谷版観光パンフレットを作成することとした。
阪谷版観光パンフレット作成にあたっては、県内唯一のデザイン科である「福井工業大学デザイン科」に協力をお願いし、「地域づくりのあり方の考察と観光パンフレットの提案」と題して研究を委託した。大学からは5名の先生方と3名の学生が、当地区からは、地元観光事業所の関係者、青年サークルも加わり、今までに2回意見交換会を実施し、「今なぜパンフレットが必要なのか」を住民に問いかけた。

意見交換会の様子1

意見交換会の様子2

② 「限界集落化している上阪谷（落合・堂嶋・金山・小黒見）の活性化」

その方策として、里山文化に着目した。里山文化を体験、学習できるように整備し、桃木峠の大杉（大野市天然記念物、森の巨人１００選）、金山遺跡と連携させた体験文化ゾーンを確立させ、交流人口を増やすことを掲げた。里山体験メニューとして、まず手始めとして陶芸の里を目ざすこととし、陶芸家の中村鐵遷（なかむらてっせん）氏（勝山市在住）の窯を視察し、地域の土にこだわることの重要性や地元窯の必要性を学んだ。

地元の粘土を混ぜこんだ器

1,200℃に熱せられた窯を視察

さらに、陶芸に関心のある方を発掘すべく「陶芸の魅力」と題して講演会を開催。実際に中村氏の作品に触れながら陶芸の魅力を再確認した。

講演会の様子

４　事業の成果

７月の第１日曜日に実施される「こだわり野菜を食するつどい」。

平成 22 年度は終了していたが、平成 23 年度に向け、屋外用オープンテーブルや不足していたスリッパも整った。勝山方面からの看板と福井方面からの看板も整備された。

こだわり野菜の植え付けの春を迎え、関係者も今まで以上にやる気が見て取れる。

観光パンフレット作成においては、意見交換会を通して多くの住民が、「いかに阪谷が多くの宝に溢れた恵まれた地であるか。」また、「いかにこの恩恵を無頓着に受け止めていたか。」に気づかされた。

これらを積極的に活用し連携して観光客を誘致しようという機運が生まれたことは大きな成果と言えよう。

また、陶芸の里づくりにおいては、やりたい仲間と指導下さる講師が見つかったことは大きな収穫であった。

５　今後の展望

こだわり野菜を食するつどいについては、年１回の開催から２回へと回数を増やすことを視野にいれていくべきだろうし、観光パンフレットを活用して、昼食バイキングから地域の資源

を活用した食育イベントに発展させることは可能であろう。滞在時間が 90 分を超えると消費が生まれると言われている。資源を連携させ、少しでも滞在時間を増やし、有機の里と結びつけた消費活動を展開し、地域の産業に結びつけたい。

陶芸の里づくりについては、上阪谷の空き家を活用したベースキャンプづくり、展示スペースづくりを進め、地元の土を発見し、地元で窯を持ち陶芸の里として交流人口を増やす。

文化が生まれ、交流人口が増え、消費が生まれ、産業が生まれ、市民力が高まり、地域が元気になる。今まさしく「地域づくり交付金」という鍵で、プラスのスパイラルの入り口を開けようとしている。「地域づくり交付金」はあくまで開けるだけ。そこを登るのは住民自身。

各種総会や女性のつどい等を利用して、積極的に「地域づくり交付金」を説明してきた。

「地域づくり交付金」を活用して、今阪谷地区が何かをしようとしていることは多くの住民に気づいてもらえたと思う。この気付きをいかに意識に高め行動に結びつけて地域を変えていくのか、２年目が正念場である。